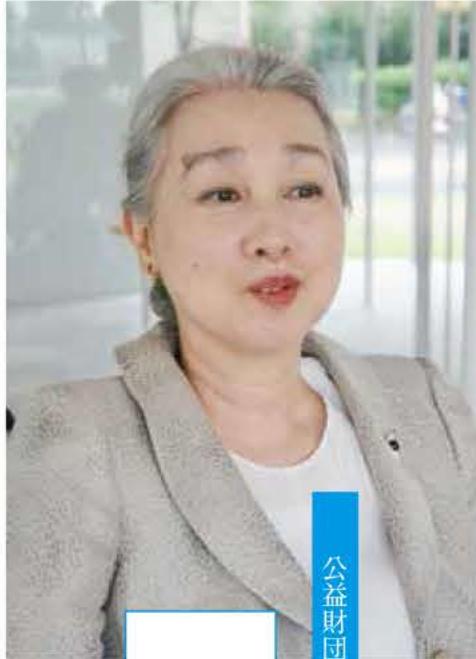


FUEKI

特集 福武純子理事長就任記念[対談]
財団が果たす 地域社会への役割



財団が果たす地域社会への役割



公益財団法人 福武教育文化振興財団 理事長

福武純子

Junko Fukutake



公益財団法人 みんなでつくる財団おかやま 代表理事

石田篤史

Atsushi Ishida

福武教育文化振興財団は設立30周年という節目を迎えるにあたり、福武総一郎に代わり福武純子が新理事長に就任しました。就任を記念して、昨年公益認定を受けた、中四国地方初の市民コミュニティ財団・みんなで作る財団おかやまを設立した石田篤史代表理事と「財団が果たす地域社会への役割」について語り合っていました。

石田——理事長就任おめでとうございます。

福武——ありがとうございます。

石田——今日の会場のJテラスカフェ（※注1）やJホール（※注2）は、福武純子さん個人で岡山大学に寄付されたそうですが、どんな思いでつくられたのでしょうか。

福武——私は、大学の垣根がもう少し低くなれば、いろんなコミュニケーションが生まれるだろうなと思っています。大学が具体的にどうしているか、どのような研究をしているかということを市民に知らなければ、市民は尊敬し、応援するでしょうし、誇りに思うようになります。だけど、知らなければそういうことが生まれてこないで、まず知ってもらうために、いろんな交流が生まれてくる場所が必要だと思いました。

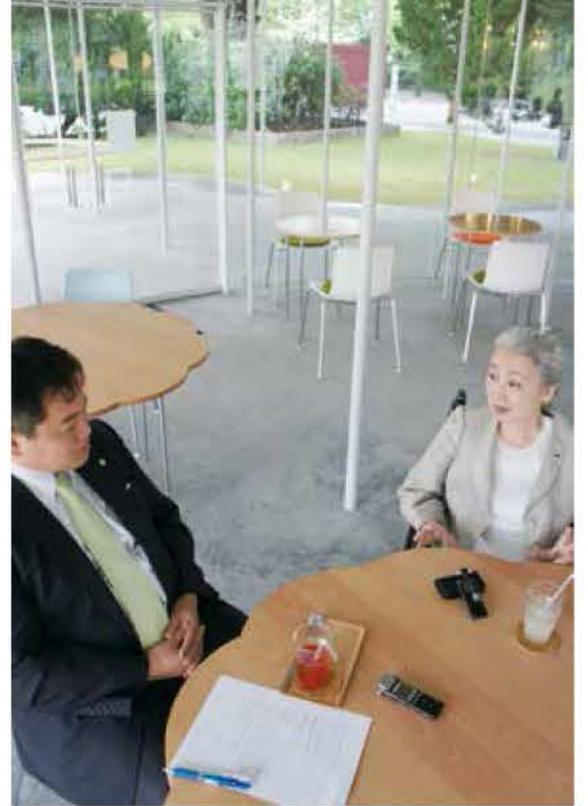
図書館でもよかったです。もう少しにぎやかな場で、いろんな人が気軽に入って来られて交流できる場所ということで、ホールとテラスを考えました。

コミュニケーションには、大学と民間、民間と企業、企業と大学などいろいろなコミュニケーションがありますが、地域全体のコミュニケーションが、ボーダレスで、男女、年齢、職域関係なく盛んに行われている世の中だと風通しがいいなと思っています。

石田——そういう意味では、Jテラスカフェは造りが明るくて、建物自体に垣根がない感じがします。いろいろな企画を通して、交流が生まれてくるような可能性がある場所だなと感じました。

このたび理事長になられて、取り組んでいこうと思われていることを教えてください。

福武——2010年に岡山に帰ってきて、あまり詳しくないのですが、いろんな地域でいろんな人が、素晴らしい活



動をしているのを知りました。それをもう少しみなさんに知ってもらいたいです。

そもそも文化というのは、みんなに知ってもらい、「いいね」という声がたくさんあがって、それが広がって定着するんだと思います。財団としてそういう検証と、素晴らしい活動を見つけて、それをみんなに知ってもらうような広報活動ができればいいな。そうすると、素晴らしいと思う人、伝えたいと思う人、自分も参加したいと思う人、作品を買おうと思う人、応援しようと思う人、いろんな人が出てくるかもしれないでしょう。そのためには、とりあえず、みんなに知ってもらいたいです。私たちは共有しあうことが大事かなと思っています。

思いがひしひしと感じられるようなグループなら、小さくても支援はしたい

石田——その点では、福武教育文化振興財団の助成事業や顕彰事業は、まさに知ってもらおうということであり、旗を立てるようなことかだと思います。助成事業だと、一つには社会的な価値や意味で支援をすることによって、事業を広げたりとか知ってもらったりという側面があると思うのです。

僕たちも助成をする財団ですが、どうやって有効に、有効にというのは難しいことですが、投資をするかということに悩んでいます。助成の仕方とか、活用の仕方というところで、考えられていることや思いなどありますか。

福武——就任して日数が浅いので、そういう意味ではまだまだ自分の力が足りないし、経験も少ないんですが、まず考えていることは、活動をしているリーダーがどう思いで活動しているのかを大切にしています。リーダーがどこまで思い、どれだけの力があるかによって、その活動は決まってくる気がします。

私は個人的にも支援している人や団体がいくつかありま





すが、話してみても、この人だったらどんどんやっていけるかもしれないと思う人には支援をするようにしています。世の中には、たくさんNPOがあります。でもほとんどのNPOは、思いはいいのだけど、あまり伸びていなくて、それっきりになってしまうことがあります。それは助成をしたからといって伸びていくものではない気がします。ぐんぐん伸ばしていく力がある人でないと、助成をする意味がない気がします。

石田——確かに、象徴的な活動とか取り組みとか、もちろん代が変わったりいろいろあったりしても、あのリーダーがいたからというところもあったりします。

福武——特に初代リーダーがどういう思いでどう突き進んでいくかによってずいぶん違うような気がします。その人の思いがひしひしと感じられるようなグループだったら、大きなくても小さくても支援はしたいと思います。

石田——リーダーに一つのエネルギー、オイルのような形で支援をしていく…

福武——そういう思いを持っているリーダーというのは、ちょっとした資金を支援するだけでぐんと活動が広がるのがよくあるので、そういう支援をしたいと思います。

石田——地域でそうしたリーダーを育てていくときに、そういう種を発見することが重要ですか。

福武——人は育てていくのではなく、自分で育つもの。やる気があって、前に向かっていく目標をもっていけば、自分で育っていくものだと思います。伸びていこうとしている人を見つけることが大事です。

石田——僕たちもインタープログラムを作るとき、機会を提供することは保証しますが、その人が伸びるかどうかというのは本人任せです。

福武——そうです。全く本人の問題だと思います。

石田——そういう意味では種を発見して、そこに対して機会を提供することが助成の一つのあり方ですね。

福武——いろんな人との出会いが、自分が育つきっかけになったりするでしょう。だから、交流がすごく大事だと思っています。ここに返ってくるわけです。いろんな人と文化を通して交わることによって、今まで知らなかった自分

自身を発見することがありますよね。そういう意味でJホールやJテラスをみなさんにいろいろ使っていただいて、自分の中の新しいものを見つけ出してもらいたいですね。

石田——交流することで種との出会いもあるし、それぞれ当事者が育つきっかけが交流によって生まれてくることもあるということですね。

福武——どんな形でもいいからきっかけになるので、いろんな人といろんな話をしてみる事が大事だと、自分の経験で思いました。

石田——団体と一緒に寄付を集める事業指定助成プログラムがあるのですが、うちのスタッフの意識としては、どうやって気づきを当事者に与えるかというのを大切にしています。プログラム期間中無理やり何かをしたとしても続かないので、それよりもちゃんと気づきができるようにということ意識しています。

福武——それはすごく大事で、生き方の節度みたいなものが必要で、子育てではないですが、あんまり入りこんでしまって、手とり足とりし過ぎると育たなくなるので、その人たちが育っていく自由度を侵すようなことはしてはいけない気がします。

世界中の人たちが素晴らしいと思っているものを、私たちは感性の根っこで持っている

石田——来年度、財団の30周年記念事業として岡山大学に寄付をされるとのことですが、どのような思いからでしょうか。

福武——岡山市出身の世界的な画家国吉康雄をテーマとした美術鑑賞教育の研究と普及を図るために岡山大学が寄付講座として「美術鑑賞教育」研究室を始められるので、当財団では寄付することを決めました。

私は国吉が本当に素晴らしいアーティストだと思っています。同窓会で「国吉のこと知っている?」と聞いたら、知らない人もたくさんいて、名前は知っているけど見たことない人もいます。岡山の小中学校を出た人たち



は、学校で習ったことがあるかもしれないけど、県外から来ている若い人たちの多くは、国吉のことを知らないので、残念に思っていました。

国吉は、岡山が誇るだけでなく、日本が誇れる素晴らしいアーティストなので、岡山大学の研究機関で若い人たちにその素晴らしさを知ってもらうこと、またご自分の専門ではなくても興味を持っている先生方もたくさんいるので、ぜひ岡山でそういう研究をしていただきたいと思っています。



石田——知ってもらうことで、新しい文化が生まれて来るとですね。

福武——アメリカでもその素晴らしさをもう一度検証しようとしてスミソニアンで約4カ月間、国吉康雄大回顧展を開催しましたが、それはアメリカが誇るアーティストとして認められている証拠だと思います。

今回の国吉展では、いろんな企業が国吉の作品を持っていたことがわかりました。企業同士のつながりというよりも、国吉でいろんなネットワークが広がりそうな気がします。国吉を愛する人たちのつながり、アートのつながりという形でも、いろんなコミュニケーションが生まれそうな気がするので、国吉を中心に新しい文化が生まれ、広がっていくかもしれないという思いはあります。

石田——岡山に帰ってこられて岡山の可能性、特徴とか何かお気づきのこととかありますか?

福武——穏やかで自然が美しい岡山を、岡山の人はもっと誇りに思っているんじゃないかと思います。

石田——よく言われますよね。

福武——私がJホールでしている宵のサロンでは、定期的に絵巻物や日本画、仏像についてのお話を聞いてもらっていて、日本人が日本の良さをもう1回よく知るための場となっています。世界中の人たちが素晴らしいと

思っているものを、私たちは感性の根っこに持っているんだということを知ってもらいたいです。

岡山の人も、素晴らしい土地があることの良さをもう1回知った方がいいかなという気がします。財団の事業が、その一助となったらいいなと。

石田——長時間にわたりありがとうございました。

福武——ありがとうございました。

注1: Jテラスカフェ (Junko Fukutake Terrace)

<http://jtcafe.jp/index.html>

岡山大学津島キャンパス内

注2: Jホール (Junko Fukutake Hall)

<http://j-hall.med.okayama-u.ac.jp/index.html>

岡山大学鹿田キャンパス内



石田篤史 Atsushi Ishida

公益財団法人みんなで作る財団おかやま 代表理事

1977年、倉敷市出身。立命館大学卒業。2000年岡山県庁入庁。特に公共工事のIT化に関わり、入札情報の公開や、成果物データベースの構築による情報の有効活用(CALS/EC)をすすめるなど建設マネジメントを中心に取り組む。2012年に岡山県庁を退職し、市民財団担当として、特定非営利活動法人岡山NPOセンターに入職。一般財団法人みんなで作る財団おかやまを市民530名の寄付により設立し、現職。地域の社会課題解決をじぶんたちの手で実現するための「あたらしいインフラ」を目指す(平成26年8月1日に公益認定)公益財団法人佐賀未来創造基金顧問、特定非営利活動法人岡山NPOセンター理事、特定非営利活動法人みんなの集落研究所監事。

第29回福武哲彦教育賞に こくさいこどもフォーラム岡山 (INTERKIDS)、 第15回谷口澄夫教育奨励賞は、 板倉真由美氏、合唱団こぶ、 ハーモニーネット未来 認定NPO法人子ども劇場笠岡センターに。

当財団では、岡山県の教育の向上のために著しい貢献をされた個人や団体に「福武哲彦教育賞」を、今後の活躍が期待される個人や団体に「谷口澄夫教育奨励賞」をお贈りし、その功績を顕彰しています。去る7月20日、岡山市内ホテルで贈賞式を終えた受賞者にお話を伺い、感想を寄せていただきました。

岡山から世界へ羽ばたく若者を育成

こくさいこどもフォーラム岡山 (INTERKIDS) (会長：今西通好)



長きにわたり、一貫してグローバル教育に取り組んだ先見性と活動力が高く評価された。特に、未来を担う志ある高校生が世代や領域を超えて学び合う国際塾では、真の国際感覚を身に付けたグローバルリーダーを育て、世界で活躍する人材を輩出している。近年では新たな観点を備えた人材育成にも尽力している点も称賛された。

活動紹介

こくさいこどもフォーラム岡山は20年前に設立された任意団体です。設立当初は児童を対象にして、外国人居住者と一緒に交流をしてきました。12年前に中・高校生を対象とした国際塾をオープンして以来、延べ300人に近い塾生が誕生しています。また近年では高校生懸賞論文やESDCafeという、中・高校生が自由に意見交換や発表ができる場を提供してきました。今年度中にはNPO法人化を予定しており、ますます高校生を中心に、将来はグローバル人材として育ててもらおうと手を高めていこうとしています。

—— 塾生の声 ——

●在塾生 長谷川 舞さん

国際塾は英語を学ぶのではなく、英語を使っていろいろなことを学ぶことができるのが一番の魅力だと感じた。別の学校の人や先輩たちと交流が持てるし、同じ志を持つ仲間が増えた。これからのこどもたちが活躍する手助けをしたいし、私自身も日本と世界をつなぐ人材でありたい。国際塾のことをもっとたくさんの人に知ってほしいし、ぜひ参加してほしい。

●卒塾生 守本 祐一さん

国際塾での体験が、自分の進路を決めるきっかけとなった。人生の諸先輩方の話を聞き、自分が何になりたいのか、何をしたいのかを考えることが出来た。そして世界に目を向けることができるようになり、自分自身の視野も広がった。今後も国際塾OBとして、活躍の場を広げていきたい。

受賞をうけて

福武哲彦教育賞という我々にとって最高の賞を受けることができたことは、過去20年間にわたってこの活動を続けてきてくれた方々に頭の下がる思いです。20年という長い期間を、任意団体として単に続けるだけでなく、発展をしてきているということは奇跡にも近いものだと思います。NPO法人化をきっかけとして、前述の3事業の内容を更に充

実すると共に、新しい事業も模索をしていきたいと考えています。何をしようと、INTERKIDSの軸足はいつも、岡山から多くのグローバル人材を育てるという点にあります。できるだけ多くの中・高校生に我々の活動を知ってもらい、より多くの生徒達がINTERKIDSの活動に参加してくれるように、更に努力を続けていこうと思います。この受賞はINTERKIDSに関わって活動をしていただいている方々、また長い間会員として活動を支援して下さった方々への大いなる勲章です。何年か先、何十年か先には再びこの勲章をいただけるように、我々も、また次世代の人たちも引き続き努力を続けてまいります。



地域と共に取り組む未来

板倉真由美 氏 (岡山市立第三藤田小学校)



中学校区4校の研究の中心となり、各校の独自性を活かしたESD(持続可能な開発のための教育)を実践してきた。特に、地域性や学校支援ボランティアを活かして行ったプロジェクトは、学校と地域住民をより強く結びつける原動力となり、地域活性化にも繋がった。その成果をユネスコスクール世界大会—第6回ユネスコスクール全国大会—や、ESD世界会議で岡山市代表として発表するなど、氏の活動が高く評価された。

活動紹介

「まず藤田の地域性を活かすため、米作りという一つの経験を軸に、学校と地域、家庭との連携によって、それに連動する様々な観点を組み込むという仕組み作りをした。授業では一つのテーマを与え、課題を決めるのは子どもたち。同じテーマを毎年繰り返しても、子どもたちの個性によって生み出されるものが異なり、とても興味深い面白い。自分が教えるというよりも、子どもたちから学ぶことの方が多く思う。ESDの活動を通して、自分たちの現在と未来を自ら学び、考え、地元をもっと好きになってもらいたい。それには私自身が楽しんで活動する姿を見せることが何よりも大切。こどもたちと地域の方々に支えられ、手探りながらも続けてきてよかった。今回、このように私たちの活動が認められ、本当に幸せです。」

受賞をうけて

第三藤田小学校では、「つながり」をキーワードとして地域とともにESDに取り組み、全国レベルでも先進的であると評価されています。どのような思いを持って取り組んでいるか、それぞれの立場からお話していただきました。

●第三藤田小学校 6年生女子

「始めのうちは、“ESD”というものが何か分からなかったが、いろんな活動が続けていくうちに、これがESDなんだと分かってきた。そのきっかけとなったのは「20年後の藤田の米作り」を考えたとき。まず自分たちができることは“お米を残さず食べる”だと考え、農家さんの思いが込められた一粒一粒を大切に食べることにした。次に、地元のお野菜を使ってふりかけを作れば、藤田のお米をもっと美味しく食べられるのではないかと考え、試作品を作った。意見を自由に出し合いながら、今の自分たちにできること、未来に残せることを実践してきた。自分の育った地域について学ぶことで、地元をもっと好きになったし、藤田地区の良いところを残しながら、どのように良くしていけるかを考えることは、とても楽しい。」

●JA女性部 小見山 弘子さん

「藤田はとても恵まれた地域で、お米やレンコン、たまねぎなどを栽培されている農家が多く、学校の体験活動への理解も大きい。恒例の全校生徒の田植えでは、毎年繰り返すうちに上達していき、6年生にもなると一人前。下級生への指導も子ども同士でやってくれ、頼もしい限り。稲刈り後の収穫祭では学校が声をかけなくても、お互い誘い合って地域のほとんどの方が参加するほど楽しい行事。学校と関わっていくことで、子どもたちが挨拶をしてくれ、一日の出来事を話してくれるようになり、自分の孫のように成長を見守っている。何より板倉先生と私たち地域の人間は、頼り頼られ、補い合うとても良い関係。地域の人材も当たり前のように後任者へとバトンタッチしていき、また繋がっていく。学校と地域がひとつになった実感ができて嬉しい。」

●ハートオブゴールド 理事長 田代 邦子さん

ハートオブゴールド(以下HG)の国際活動の一つとして、第三藤田小学校と国際理解教育に取り組んできた。子どもたちは生き生きと楽しそうに、積極的に質問してくれる。先生の姿勢も随分変わった。ESD活動の一環として世界について学び知るにより、自分が広がり、命の尊さを理解し、人も自分も本当に大切な存在だと実感し、すべてのことに感謝する。そして身近な生活を変えていく大切さを知り、実践に繋がる。自分の人生に大きな意味を持った勉強だと一生懸命取り組んでくれる。一人ひとりが多くのことを学んで、HGのめざす「共育」が息づいてきた。先生も生徒も明るく元気で、学校に行くたびに私自身もパワーをもらっている。

出会いをつむぐ歌の力

合唱団こぶ (代表・指揮者：大山敬子)



団員一人ひとりの資質は高く、指揮者の指導力と熱意が組織の団結力をより強くしている。音楽に対する真摯な姿勢と取り組みは、後進の手本となるものであると高く評価された。今後も県内外へ向け、歌の力による地域活性化の活動を広く発信することが期待される。

受賞をうけて

このたびは「谷口澄夫教育奨励賞」という貴重で素晴らしい賞をいただき、団員一同大変嬉しく思っております。私たちの活動を知っていただき、私たちの音楽を一人でも多くの人に聴いていただくことが喜びです。

毎週土曜日18:00～21:00総社勤労青少年ホーム・総社西中学校で練習をしています。様々な形の音楽に挑戦していますが、常に「その曲を大好きになる」を目標に追求しています。

’92年「総社東中OB合唱団」として結成され、’98年「合唱団こぶ」に改名。結成当初から全日本合唱コンクールへの出場を続け、’09年から6年連続で全国大会へ出場しています。’09年に総社市教育委員会表彰、’14年に第15回岡山芸術文化賞準グランプリを受賞するなど、多くの方々から応援をいただきながら活動しています。毎年3月ふるさと総社にて主催コンサート「こぶこん」を開催するほか、地域行事や病院、施設での依頼演奏等、年間多数の演奏活動の中で、聴いてくださる方々と感動を共有させていただいています。今年5月に総社で初のオペラ「カルメン」に取り組み、新しい音楽の世界に出会い、素晴らしい仲間にも出会えました。このように同じ志を持ち、同じ時間を過ごすなかで、私たちの絆はとて強くなりました。団員同士で『家族』となった例も多くあり、結婚や出産を通じて、新しい生命に

バトンが繋がっていくことが何よりも幸せです。

夢中に走り続け22年目を迎えますが、『音楽を求め であいを求め』を合言葉に、多方面からご支援をいただき、活動してまいりました。メンバーの入れ替わりによって、毎年平均年齢が20台前半の若い合唱団ではありますが、メンバーの成長とともに、ふるさと総社から発信の音楽を全国に広げる活動ができ始め、現在では「地域の音楽文化を発展させ、心豊かな町づくりに貢献する。」という目的を持って自分たちの演奏活動だけでなく、中高生の指導やそれぞれの発展的な音楽活動も行っています。

舞台の上で一体感をもち伝えたい音楽が、聴く人の涙や笑顔、拍手に届くとき、心から「音楽が好き」と思えます。しかし、そのような音楽を奏するためには本当に多くを学ばねばなりません。歴史を、文学を、宗教を、自然を・・・人とのであいを。この受賞を節目として、感謝の心をもちさらに精進してまいりたいと思います。ありがとうございました。

地域のみんなで創る居場所

ハーモニーネット未来 認定NPO法人子ども劇場笠岡センター (理事長：宇野均恵)



精力的な活動を継続し、子どもだけでなく保護者や地域の幅広い年齢層に対して、文化・自然・生活体験活動や創造活動等の推進、社会体験や社会参画の機会の拡充などに注力されている。県や市と連携を図るとともに、文部科学省委託事業を積極的に実施し、県下第一号の認定NPO法人として活動実績を確立したことが高く評価された。

受賞をうけて

このたびは、思いがけないごほうびに驚き、同時に長年の活動をこのように評価していただいたことに、心より敬意を表し、感謝を申し上げます。

1987年に設立以来、子ども時代が豊かであってほしいと願い活動してきたNPO法人ですが、「子どもにとって“よい環境”とは、今を生きるすべての人が自分らしく尊厳を守ることができる社会である」と確信し、現在は親子のみならず、高齢者、障がい児(者)、若者へと広がってきています。子どもたちへの文化・自然・生活体験活動の提供や、「子育てひろば」やだれでも気軽に集うことのできる「ふれあいひろば」、また大きな家族のように、会員同士の「たすけ合い」など自分らしくいることのできる「居場所」を大切に考え活動を続けてきました。その思いが実を結び、2013年3月25日、岡山県第一号の認定NPO法人に認定されました。

思い返せば、多くの出会いをくりかえしながら、活動が広がってきた28年間でした。現在の事務所は、岡山県製粉製麺工業協同組合が建物の保存を願って笠岡市に寄贈したものを、当法人が市から貸与されました。この建物は高梁市の吹屋小学校等を設計した江川三郎八氏の弟子が昭和5年に建築し、通称「江川式」といわれています。この由緒ある建物を守りながら、多くの人々が集う場として毎日にぎやかに活動を行ってきました。そんな中、忘れもしない2004年8月31日のこと、大型台風による高潮被害にあいました。その惨状に今後どうなることかと心配しましたが、活動を共にしてきた多くの人々が駆けつけてくださり、また、全国各地からご寄付をいただき、見事復旧することができました。私たちが描き続けてきた「人と人とのふれあいを大切に、助け合いの気持ちを持った多くの人の憩いの場」であることが証明された出来事でもありました。

今後も、子どもたちの心豊かな成長と、今を生きるすべての人が自分らしく安心して生活できる地域社会の創出に寄与していくため、行政・企業・各種団体・地域の多くの人と協働し、さまざまな事業を組み立てていきたいと考えております。微力ではありますが、「地域のすべての人が主役になり、活動できる支え合いと活気ある社会」「すべての人に居場所と出番があり、人の役に立つ喜びを大切にする社会」の実現に向けて活動を続けていきたいと思っておりますので、引き続き、ご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

「地域のなかでアートを考える」

児島半島の先端の下津井に館長や学芸員がいない小さな美術館「吹上美術館」が2015年春にオープンしました。美術館の管理運営だけでなく、展示の内容や企業とのコラボレーション企画などを担っているのは、地元の若者3人が立ち上げた一般社団法人クリエイターズラウンジ。代表を務める片山康之さんに美術館を始めた思いを伺って来ました。(和田広子)

児島に住んで30数年という片山さんは、倉敷芸術科学大学で彫刻を学び、2008年には29歳で日展特選を受賞、新進彫刻家として注目されました。その後もアートフェアに参加したり、美術館やギャラリーで個展したりと活躍する一方で、児島で暮らすアーティストとして地域の中で何ができるのかを考え始めたそうです。

まず、作家集団クリエイターズラウンジを立ち上げて座談会や展示会、ワークショップなどを企画し、作家と地域をつなぐきっかけづくりに取りかかりました。3年ほどたち、そろそろ自分たちの「場」が欲しいなと思っていたところ、旧荻野美術館の活用を考えてほしいと地元の方から声がかかりました。「最終的に美術館に決めたのは、元々美術館だったということも大きいですが、まわりの反応がよかったし、面白そうだったから。機能のリノベーションです」と片山さん。

知り合いのアーティストの作品を「のんびりとみせていくつもり」で始めましたが、企画やグループ展、ワークショップやトークイベントなどスケジュールは来年まで決まっています。美術館に関わってくれる人は、地元の大学や学生、企業やホテルなどにも広がり「思った以上に大変だけど、思った以上の手ごたえを感じている」そうです。

「吹上美術館は地域との関係を、人と人との交流だけで考えるのではなく、モノや場所、資源や風土、歴史とも関わり合うべきだと思っています。最近では関係性を問うようなアート作品も多いですが、アートの中でアートを考えるのではなく、地域の中で、アートってどういう意味があるのかを考えていきたいと思っています。そのためには、地域の特性をつかむ時間が必要だけど、そこは既につかんでいると言わせて欲しいです。ずっと児島で暮らしてきましたから」

オープニングは8名の作家による「Artists」を開催。期間中は作家のレクチャーや出張喫茶などを企画。今後は美術館として作品の収蔵もしていきたいと考えているそうです。

地域が支えていく美術館は、美術館としての役割の他に文化や教育、観光や産業とアートが交差する拠点となるための取り組みが始まっていました。



一般社団法人クリエイターズラウンジ代表

片山康之

吹上美術館 <http://fukiage.jp/>

高本敦基展 — 並置思考 —

2015年7月25日(土)～10月25日(日) 有料

◎レクチャー Vol.2

渡邊義孝×山口晋作

『空き家の活用～尾道と下津井～(仮)』

10月3日(土) 有料

片山康之(かたやまやすゆき) / 彫刻家

1978年生まれ。倉敷芸術科学大学大学院芸術研究科美術専攻修了。岡山県美術展山陽新聞社大賞(2008)、岡山芸術文化賞準グランプリ(2009)、マルセン文化賞(2009)。吉備高原学園高等学校講師。2010年からクリエイターズラウンジ(2014年から一般社団法人)の活動を始める。倉敷市児島在住。

国吉康雄の絵は 自分の人生を、 大なり小なり考える契機

岡山大学大学院教育学研究科国吉康雄講座 准教授
クニヨシパートナーズ ディレクター

才士真司

—なんてこという人が、年齢・性別問わず、結構いるようだ、この3年、岡山で様々な仕掛けたイベントや国吉の取材でわかってきた。それでちょっと、昨年の国吉祭のアンケートに、「国吉のナニに惹かれる?」という問いをたて、答えを次から選んでもらった。

『画風・色・人生・生きた時代』

正直を言うとこれ、僕が国吉に惹かれる理由。ただ、アンケートの結果って、どこかにまとまっちゃうかなと思っていただけ、結果、それぞれが等分に票を集めていた。まあ、国吉を気にしたきっかけというのは鑑賞者それぞれで、国吉の絵は、向き合った個々にアプローチをしているってことなんだろう。確かに僕は、じっと国吉の絵に魅入る、たくさんの人たちの姿をみてきた。つまり、国吉の絵には人々の興味を誘導する様々な仕掛けがあるんじゃないかと。それは、スミソニアンで開催されている国吉の回顧展とかの反応を見ても思うことだから、国籍とかも関係ないんだと思う。

国吉の絵に描かれたモチーフや色彩、詩的で哲学的なタイトル、描かれた時代。こういったシグナルに気づいたら、国吉の絵の前に立つ鑑賞者は絵の観察者へと変化する。30秒程度だといわれる美術館での1枚の絵の前での滞留時間は難なく破られ、絵

に向けていた箭の問いが、いつのまにか自身へ向けられていた…なんてことがままある。

こういう面白さが国吉の絵の効能なんじゃないかと改めて考えると、「どうしてそんなことになるんだ」と、またうまく説明できない問いが入れ替わりにたってしまう。

そんな話を色んな人にしていたら、「それ、研究してみようよ」という話があった。つつ、この効果を最大限に活かした美術鑑賞教育プログラムを開発し、教育の場や美術館で実践してみてもどうかと。これが、岡山大学教育学部での国吉康雄研究室設置に至る、あるひとつの経緯で、研究すべきプロジェクトのひとつ。こういう研究の成果とかシェアできれば、国吉の絵を通して物事を深く、かつ複合的に考える思考法を身につけることができるんじゃないかなと。どうでしょう。

国吉康雄の新たな活用法とそれを研究、実践していこうという、岡山大学の国吉康雄研究室の活動に興味を持っていただけたでしょうか?

そうだと、嬉しいな。

※クニヨシパートナーズ

岡山での国吉康雄顕彰活動及び研究活動を企画、運営、管理するために出石町(岡山市)の各団体が参加して設立した団体



国吉康雄回顧展の準備の様子(スミソニアン美術館)

お客様は神様 ————— 杉浦慶侓

日本舞踊の舞台を初めて観てきました。

お目当ては花柳大日翠さん。30代前半という若年ながらもめまぐるしく活躍をされている、舞踊の世界では知る人ぞ知る有名人なのです!……と知ったかぶりをしておりますが、私はそれまで日本舞踊の舞台など観たことがありませんでした。

なぜなら三味線や鼓を伴奏に、袴姿に扇子で踊る古典的で難解なイメージ。実際パンフレットの解説文であらかじめストーリーを頭の中に入れ、いまがどの場面かを時折耳で聞き取れる言葉の端と身体の動きで読み取るのがやっと、という感じでした。

では結論として、公演がつまらなかったのかといえばそうではありません。舞台の上には満員御礼の客席の視線を一手に引き受けて舞う、花柳大日翠がいました。

水を打ったように静まりかえる会場。その中でひとり踊り続ける様はまるで巫女のそのようで、エンターテインメントを通り越してなにか神秘性さえ帯びていました。

そもそも「舞」の発祥には諸説ありますが、ひとつには神に捧げる祈りとしての行為があります。先日の舞台で感じたのもそんな何か大きなものへと自らの身を捧げる、ひたすらに純粹で透明な魂の力強さでした。

会場で配布されたチラシによると毎月のように舞台が控えています。彼女は蓄積する疲労と闘いながら、満身創痍で踊り続けているのです。翻ってそれはどんな舞台にも一切手を抜かない演者としての真摯な姿勢の証でもあります。

どうやら彼女が心おきなく休息をとれる日はまだまだ先になりそうです。きっと神様さえもが彼女の舞をもっと観ていたいに違いないからです。

すぎうらけいた / 写真作家 1980年岡山県生まれ、津山市在住。平成17年に津山市へ帰郷して以来、活動拠点を地元・津山とし、自然と人間の関係をテーマに制作を続けている。2008年「GEISAIMUSEUM#2」、ウィクターピンチェック賞、「GEISAI#1」銅賞 / 2009年「I氏賞選考作品展」大賞 / 2010年福武文化奨励賞



写真の人 花柳大日翠

はなやぎおおひすい / 日本舞踊家 1984年岡山市生まれ。幼少の頃より日本舞踊の稽古に励み、日本舞踊の五大流派の一つ花柳流全門弟代表の人間国宝・花柳寿南海に師事し、現在最も飛躍が期待されている若手日本舞踊家の一人。若手日本舞踊家で構成する「藝〇座」(げいまるご)の同人となり、古典のみならず時代性を盛り込んだ創作舞踊にも挑戦し、自己研鑽に努めている。2014年福武文化奨励賞。

Editor's Column

▼6月の役員会で、福武總一郎が理事長から名誉顧問に、前副理事長・福武純子が理事長となり、その後任として松浦俊明が副理事長を務めることとなりました。新理事長、副理事長を迎え事務局には新しい風が吹き込まれています。対談(p2~5)では理事長としての思いを語っています。皆さまの「いいね」がたくさんいただけるような財団にしていきたいと思えます。▼8月4から10日までアメリカ・ワシントンのスミソニアン美術館に行ってきました。目的は、もちろん「国吉康雄大回顧展」をみるためです。ニューヨークタイムズも取材に来たこの展覧会は、注目され、好評を博しました。今後様々なかたちで行なわれる国吉康雄に関するイベントにご注目ください。

機関誌

不易

F U E K I vol.58 2015.10.1 (次号は来年1月25日発行)

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

編集・発行:

公益財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3F
TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190
URL <http://www.fukutake.or.jp/>
E-mail eczaidan@fukutake.or.jp

制作:
株式会社 吉備人
デザイン:
田中雄一郎(QUA DESIGN style)
印刷:
広和印刷株式会社